

デザイン部会

ルーテル学院大学新校舎、 見学会・シンポジウムで表出したもの



連 健夫

ルーテル学院大学新校舎見学会・シンポジウムが8月6日、JIAデザイン部会の協力で催された。ルーテル学院大学の既存校舎は村野藤吾氏設計であり、既存校舎も併せて見学会を行い、その後「歴史的コンテクストの継承と参加のデザインによる意味の建築」をテーマにシンポジウムを行った。100名を超える参加者があり、村野建築の根強い人気を改めて感じる事が出来た。

新校舎については、食堂の改修コンペで当事務所が選出された流れから、新校舎の設計コンペのアドバイザーとなり、その中で既存校舎の尊重と学生参加のワークショップを提案したことが評価を受け、設計を依頼された経緯がある。既存校舎を調べる中で分かったことは、

1. コンセプトはルター派の建築家・ソビック博士が考え、それを村野氏が受けて設計したこと。
2. ソビック氏の当時の来日目的は設計者選定ではなく、コンセプトを小冊子「神の民の家」にまとめることであったこと、などである*1。

従って、新校舎設計においては、コンセプトの継承とそれを受けた村野氏の解釈としてのデザインの読み取りが必要とされた。またもう一つのポイントとして学生参加のワークショップがある。一般に校舎の設計といえば、教師と職員との打合せで決まる傾向にあるが、本当の利



見学会、新校舎

用者である学生を参加させることの大切さを説明する中で、大学側に学生参加のワークショップが受け入れられ、学生のイメージを反映すべく設計をしたことである。これらから具体的な設計として、既存校舎チャペルのデザイン要素であった十字架形を平面計画やデ

ザインに活かしたこと、安定感としての台形と共に、学生の求めるダイナミックな雰囲気として曲面をデザインに活かしたこと、和風の要素として地窓や縁側などを採用したことがあげられる。また学生からの強い要望であった木の利用については、耐火性能検証法を用い大教室に木造屋根を設けたことや木格子の日除けやフェンス、木質の内装で応えた。今日的な環境上の配慮としては、東京理科大学の武田仁先生のアドバイスにより光触媒処理したトップライトに散水をして水冷ビルの効果を採用したことなどがあげられる。

さて、シンポジウムはこの発表を受けて「歴史的コンテクストの継承と参加のデザインによる意味の建築」についてのディスカッションである。コーディネーターは、東京理科大学の川向正人先生、パネラーには芦原太郎氏、藤木隆男氏、渡邊研司氏という論客である。芦原氏は白石市第二小学校の経験から、ワークショップによって子供たちに強い臨場感を与えることの良さを指摘した。また刈田総合病院設計時におけるワークショップを通して、病室の前のテラスなど新たな創造的デザインが生まれたことを説明された。藤木氏は、新校舎のデザインに「安心した」という感想と共に、西戸山小学校や湯河原銀河館などの事例を掲げ、地域特性や歴史性など個別の視点の大切さを説明された。そして設計プロセスにおける徹底したヒアリングの中から施主のアイデアを引き出すことの意味を説明された。川向氏は、研究室の長野県小布施町における町遺産発見や土壁づくりワークショップなどの活動を紹介し、歴史的視点について、参加者と意識が共有できる良さと共に、しっかりとしたプログラムを



見学会、既存チャペル

作ることの大切さを指摘された。渡邊氏はコラージュによる設計やワークショップによる参加のプロセスの創造性の認識と共に、その知見を現実化するためにはしっかりとしたスキルが不可欠とし、そのバランスの重要性を指摘した。私は、心と対話する建築づくりの方法として、施主が作るコラージュからヒントを得て設計しており、AAスクールでのコラージュの経験、理論的裏づけとしてのユング心理学があることを説明し、プロセスを通して建築に新たな意味が生まれることを説明した。

質疑の中で、「建築家としてデザインの普遍性を追求することが大切ではないか」との指摘があった。また「設計の中で本音を聞きたかった」との話もあった。いずれも時間に制約があり応えることができなかった。この誌面で私の考えを説明したい。利用者参加のデザインプロセスは、利用者のニーズに対して、そのまま迎合的に応える設計ではなく、参加のワークショップを経て設計条件が新たに加わり、その解釈の中で設計すると考えると理解し易い。従来の設計条件だけでは生まれない新たな知見を加味して、建築家として創造的デザインをするわけであり、そこには最適解を求める姿勢が存在する。ただし、地域の個性や利用者参加の個別的知見があるため、結果としてのデザインは、どこにいても成り立つという普遍性はない。むしろ結果としてのデザインの個性が大切と考える。従って、手法に普遍性はあるが、デザインにおける普遍性は否定的なのである。この考えの背景として、歴史的視点を抜きにすることはできない。近代建築の一元的価値観においては、結果としてのデザインの普遍性を説明することはできたが、ポストモダニズムにおける価値観の多様化、特にコンセプトリアリズム（概念主義）、コンテクスチュアリズム（文脈主義）やナラティブアーキテクチャー（物語建築）においては、そのプロセスや思想を抜きにして結果としてのデ

ザインのみを評価することは無意味となっている。加えて都市計画においてもトップダウンから市民参加の街づくりなどボトムアッププロセスが一般化している現状を捉えても、そのプロセスや思想といった個別的背景を抜きにして、結果としてのデザインの普遍性のみを迫及することは、今やナンセンスとなっている。これについては拙著^{*)}を参照して頂ければありがたい。

さて、ルーテル大学の新校舎設計を体験した本音の話であるが、大学側で村野建築の価値を認めていたのは確かであるが、その理解が深まったのは、そのネガティブな部分が見つかったということである。そのネガティブな部分とは何かというと、バリアフリーの問題である。既存校舎は、迷路的でどこに居るか分からない。段差が多く車椅子に支障がある、などの問題を抱えていた。バリアフリーへの改修設計をする中で、多くのディスカッションを大学側と重ねた。この中で、村野氏の設計意図である神の民の家をつくることにおけるデザイン解釈、すなわち、風景をつくる移動空間、気持ちの切り替えとしての段差、などを説明した。また学生参加のワークショップにおいても、最初に既存校舎の建築的価値について説明し、学生の「そんな有名な建築家の設計した校舎で勉強していたとは知らなかった、これからは大切に使いたい」などの反応があり、大学側のみならず学生においても、建築の理解において設計プロセスが大切なことを強く感じたのである。

シンポジウムのアンケート結果を紹介したい。「建築におけるワークショップについて考えさせられた」「ワークショップを共通用語として創造性に繋ぐという大変良い議論でした」「継承と創造性について勉強を進めることが出来ました」「図面だけではコンセプトを伝えきれない、コラージュの方法はそれを越えることができる」これら参加者の反応からも、議論を重ねることの大切さを感じることができる日であった。

- *1 「ルター派建築家E.A. ソビック博士によるルーテル神学大学建設のための小冊子（神の民の家）の出版の役割と意味について」（渡邊研司、進藤夫）2002年日本建築学会関東支部研究報告集、「小冊子（神の民の家）における設計コンセプトと建築形態への対応について」（渡邊研司、進藤夫）2004年日本建築学会大会棟集
- *2 『心と対話する建築・家』心理・デザインプロセス・コラージュ（技報堂出版）進藤夫著
（進藤夫建築研究室）



シンポジウム（左から、筆者、渡邊氏、藤木氏、戸原氏、川向氏。）